

令和元年度

中野駅周辺整備・都市観光調査特別委員会

地方都市行政視察調査報告書（案）

1 訪問先及び調査事項

調査日	訪問先	調査事項
令和元年12月12日	群馬県高崎市	高崎アリーナ・高崎芸術劇場について
令和元年12月13日	群馬県利根郡みなかみ町	みなかみ町の観光施策について

2 調査内容

高崎市

「高崎アリーナ・高崎芸術劇場について」

(1) 高崎市の概要

高崎市は、平成18年に5町村（群馬町、箕郷町、榛名町、佐波郡玉村町、倉渕村）と、平成21年に1町（多野郡吉井町）と合併し、人口37万人の県内最大の都市となり、平成23年4月には中核市に移行している。

現在、高崎駅周辺では、国際規模を誇る新体育館「高崎アリーナ」が整備され、高崎アリーナ周辺地域を循環するシャトルバスを運行することにより、大規模な国際大会にも対応できるものとなっている。

また、駅東口には、あらゆる舞台芸術に対応する「高崎芸術劇場」が完成し、文化芸術の拠点として更なる発展を目指している。

現在の市域は459.16km²、人口は373,286人、世帯数は166,102世帯（令和元年11月30日現在）、予算規模は1,681億4,000万円（令和元年度一般会計予算）、議員定数は38人である。

(2) 視察経過

① 高崎芸術劇場

高崎芸術劇場では、稲山施設管理部長同行のもと、2027席の大劇場、最大1000人収容可能なスタジオシアター、412席の音楽ホールを視察した。

〔施設概要〕

高崎芸術劇場は、令和元年9月20日に開館した。古今東西のさまざまな音楽や舞台芸術の公演に対応した2027席の大劇場。ロックコンサートや演劇・舞踊・能などの多様なパフォーマンスが可能なスタジオシアター。412席の本格的音楽専用ホール。リハーサルやレッスンのための9つのスタジオなど「鑑賞と創造」が一体化した施設である。「都市は劇場であり、

劇場は都市である」という理念の下、その中心として存在している。

《主な質疑応答》

(問) 大劇場のバリアフリー対応の工夫は。

(答) 高齢化社会の劇場のあり方を考え、客席は2階席までとしている。ゆるやかなスロープや階段など、利用者に配慮したつくりとなっている。また、通路側の一部の座席の肘掛けは取り外しが可能で、車椅子から移動して着席できる配慮もしている。

(問) スタジオシアターの特徴は。

(答) 平土間にも変化し、スタンディングで約1000人が収容可能。舞台と客席が平土間、3間、5間、7間まで変更が可能で、多様なパフォーマンスに対応できる。

② 高崎アリーナ

高崎アリーナでは、会議室Aにおいて、大塚部長から施設概要の説明を受けた後、メインアリーナ、サブアリーナ他、各施設を視察し、質疑応答を行った。

〔施設概要〕

高崎アリーナは、最大収容6015席（固定式観覧席3000席、可動式観覧席1022席、車椅子利用者観覧席21席、仮設席（運営者側1972席））のメインアリーナ、観覧席100席のサブアリーナ、柔剣道場の他、会議室などを備え、さまざまなスポーツ大会を開催する他、コンサートなども行っている。また、市民の交流・賑わいが生まれる空間として、70m×10mの「シビックプロムナード」はイベント時以外は市民に開放されている。

施設が3年目となり、利用者数は初年度が24万人、昨年度が28万人、今年度は上半期終了時点で15万人強となっており、毎年利用が増えている状況にある。もともと日本製粉の工場があった2haの土地を利用している。JRと上信鉄道の間の敷地であり、駐車場も平面にとれず、地下に設置（200台、利用料半額）しているが、車利用の多い群馬県においては足りず500m離れた野球場に500台の駐車場（無料）を用意している。

《主な質疑応答》

(問) 観覧席の周りのランニングコースは選手のアップ用か。

(答) 市民も利用でき、ランニングの利用だけで来る人もいる。

(問) 可動式観覧席とは、どれになるのか。

(答) 図面の移動式観覧席511席が2カ所で1022席。それぞれ7ブロックに分かれていて1ブロックあたりは70席ほど。

(問) 仮設席というのは。

(答) 業者が持ち込むもので、図面の仮設席（運用者側）1972席がこれにあたる。

(問) そうすると、スタンド固定式の3000席と、移動式の1022席で4022席、あとの約2000を仮設して6000ということか。

(答) そういうこと。最大で6000人。

(問) コンベンションみたいな使い方はしないのか。

(答) 今のところはしていない。進学相談会のブースをつくるなど、スポーツ以外の利用もある。県の施設でGメッセというのを現在建設中で、そちらはコンベンション利用も行う。

(問) コンサート利用の時は、どのような配置になるのか。

(答) ステージを南側1/4に設置し、アリーナに椅子を持ち込んで行った。

(問) 今年度は30万人を超えるとのことだが、稼働日数はどのくらいか。

(答) 初年度が7割、今年度は9割を超える。全館を閉鎖する時の他、がらがらという日は、数日しかない。客席が一杯ということまではいかないが、メインアリーナは週末は、ほぼ一杯になる。

(問) スポーツ利用とそれ以外のエンターテインメントの利用割合は。

(答) ほぼスポーツ利用。スポーツ優先で、たまたまタイミングがあって、今年はコンサートを3つ行った。

(1) みなかみ町の概要

平成17年に3町村（水上町、月夜野町、新治村）が合併し、現在のみなかみ町となった。現在の町域は781.08km²、人口は18,709人、世帯数は7,999世帯（令和元年12月1日現在）、予算規模は136億8000万円（令和元年度一般会計予算）、議員定数は18人である。

また、中野区との里まち連携自治体でもあり、たくみの里事業では、「カタチに残る思い出作りのできる里」をコンセプトに、さまざまな体験事業を行っている。

(2) 視察経過

みなかみ町の観光施策について【みなかみ町公民館、たくみの里】

みなかみ町公民館会議室にて、高野DM推進室長から説明を受けた後、質疑応答を行った。その後、たくみの里に移動し、農村公園公社の上田常務理事から、たくみの里事業の経緯、事業概要の説明を受け、質疑応答を行い、施設の視察を行った。

(3) 説明概要

① みなかみ町の観光施策について

みなかみ町では、平成17年の合併後10年間で4,000人の人口減・高齢化問題への危機感から町長の諮問機関として「まちづくりビジョン策定委員会」が組織され、平成27年3月に町長への答申（観光・農業・子育て等）が提出された。

町の観光課では、この答申を受け、観光関係者23名からなる「みなかみ観光会議」を設立し、問題点等について協議した（会議11回、座長会3回、分科会7回、勉強会4回など）。

その後、平成28年からみなかみ版DMO（Destination Management / Marketing Organization）をスタートさせ、観光関係者だけでなく町民も含む多様な関係者を取り込んだ観光施策を行っている。

インバウンドの取り組みとしては、5つのターゲット国（台湾、タイ、シンガポール、インドネシア、オーストラリア）を定め、宿泊者数80,000人を目標として戦略を進めている。

経過としては、平成20年3月に『第1次みなかみ町総合計画』を策定し、国際観光の推進に着手。平成22年4月に『インバウンド推進協議会』（58施設、インバウンドに積極的な観光関係施設で組織）。平成24年4月に観光課内に国際観光グループを設置し、本格的にインバウンドの取り組みを開始した。

《主な取り組み》

○Wi-Fi環境の整備

NTTが機器を無償提供、SSIDをグループ化、みなかみタウンWi-Fiに一本化
現在は110カ所に拡大。

○インバウンド対応支援事業

町独自の補助金：平成27年度34施設、Wi-Fiの環境整備などに利用。

観光庁の補助金：Wi-Fiの環境整備、トイレ洋式化、和室の洋室化等に利用。

○多言語版パンフレット作成（英語、繁体語、簡体語、タイ語、ハングル語）

○JNTO外国人案内所認定

上毛高原駅、高崎、前橋の3カ所

○路線バスの外国人フリーパス

東京から最短66分だが、二次交通が問題。2100円で3日間乗り放題。

JRパスと組み合わせて販売。

○Minakami TV（動画配信）

ターゲット国（台湾、タイ、シンガポール、インドネシア、オーストラリア）の中でも、台湾については、町と台南市が友好協定を結んでおり、嗜好もマッチし、リピート率も高い。宿泊客数の目標も40,000人と突出している。タイはリピーター率が高く、冬場に長期休暇があたり。シンガポールは県が力を入れていること、インドネシアは今後の伸びが見込まれること、オーストラリアはスキー客を見込んでターゲット国としている。また、近年は、2022年の北京冬期オリンピックを見据え、シンガポールに替えて上海をターゲットとして選定した。

《主な質疑応答》

（問）観光協会の職員の給料は。

（答）アルバイトもいるが、ほとんどの職員は給料制。

（問）国内旅行者向けの対策は。

（答）首都圏からの30代女性をターゲットにしている。

② たくみの里事業について

たくみの里というと、テーマパークのようなものを思い浮かべる人が多いが、そういった施設はほとんど廃業している。体験型のテーマパークは非常に難しい手法である。当事業もそういったものをモデルにしながら、みなかみ版（旧新治村版）の施設として、330haの広さの中に施設を点在させているところが特徴的。

この地域は、江戸と越後を結ぶ三国街道の宿場町・須川宿で、自然が多く、観光に縁のない土地であった。この広い土地に、施設を点在させることによって、お客様にまんべんなく自然を感じてもらおうというコンセプトの下、事業を行っている。

たくみの里は、昭和59年から始まって、ピーク時には43万人の来客があった。この地域は、純農村地帯であり、新治村の観光課長が、観光地にしようとして始めた「野仏めぐり」が発端であり、年間2万人が訪れた。しかし、トイレも整備されておらず、携帯電話もなく、観光客がトイレを借りに来るなど、住民には不評だった。しかし、当時の観光課長はこれをチャンスととらえ、村で建物（6施設）を建てて、農村の暮らしを伝える「たくみ」を管理人としておいた。現在は体験型施設が27施設、食事を提供する施設が22施設となっている。

行政ができなかった農地を管理すること、収益事業を行うことをできるということが公社で事業を行う利点であった。また、公益事業として、先進的な試験栽培を行い、それまでは、果

樹栽培を行っていなかったが、今ではさくらんぼやりんごなどのフルーツ栽培地帯となった。また、バスが採算があわなくなったことにより、馬車を導入したり、電動自転車や電気自動車を導入したりして、将来的な課題としての二次交通問題にも取り組んでいる。中野区との関係としては、伝統工芸展との交流が深い。

《主な質疑応答》

(問) 農村公園構想をつくったのは何年。

(答) 昭和58年。

(問) 道の駅ができたのはいつ。

(答) 豊楽館ができたのは、総合案内所の位置づけ、平成8年にできた。道の駅の指定は平成17年で後付けで指定された。

(問) 自転車で一周まわるのにどのくらいかかる。

(答) 電動自転車で1時間ほどかかる。普通の自転車では、高低差もあり、きつい。

(問) 施設で働く人はどういった人。

(答) 公社でお願いした人と、集客があがった後、民間から参入してきた人がいる。現在は民間からの参入がほとんど。

(問) 採算性は。

(答) 当初6施設の時は、採算がとれず、町から日当の半分を負担していた。現在は独立採算制。寒い時期は厳しい。